

震災があっても
今年もやります!

夏の実践研究会のご案内

期 日 平成28年8月19日(金) 8:30~16:00
内 容 公開授業 国語(附属小 坂崎教諭) 算数(附属小 大林教諭)
 公開授業研究会
 各教科等の授業づくりセミナー

日 程	8:30	8:45	10:15 10:30	11:15 11:30	12:30 13:30	15:35	15:50
	受付	講演	休 憩	公開授業 (国語・算数)	休 憩	教科別授業 研究会	昼 食
						各教科等 授業づくり セミナー	閉会 行事 (放送)

申し込み 参加費は¥1,000です。
 別紙案内状を参照の上、ファックス(096-356-2499)にて申し込みください。メールでの受付も行っています。
 メールアドレス(miyadai@educ.kumamoto-u.ac.jp)

講 師 熊本大学教育学部 藤瀬 泰司 准教授
 「何のための資質・能力、何のための学校か ~教科教育学(社会学)の視点から考える~」

熊本大学教育学部 渡邊 重義 准教授
 「新しい時代に必要となる資質・能力を問う ~学習の文脈と資質・能力の育成~」

申し込みが切 平成28年8月12日(金)

震災復興特別企画!

冬の実践研究会のご案内

期 日 平成29年2月10日(金)
全体会講師 上智大学教授 奈須正裕先生



附属小学校ホームページのご紹介

明日の教育を変えていく ● 授業研究最前線
 本校教員が綴る実践と研究 ● 実践・研究ブログ

ホームページ <http://www.educ.kumamoto-u.ac.jp/~elem/> 熊大附属小 検索



研修会・講師に関するお問い合わせ先

校内研修や研究会の講師として本校教員をお考えの際は、電話か次のアドレスにお問い合わせ下さい。

kuro@educ.kumamoto-u.ac.jp

(副校長 黒川哲治)



熊本大学教育学部附属小学校 研究だより VOL.45

発行日 平成28年7月4日

編集・発行 熊本大学教育学部附属小学校 〒860-0081 熊本市中央区京町本丁 5-12 TEL 096(356)2492 FAX 096(356)2499

VOL.45

平成 28年度 熊本大学教育学部附属小学校

附属小 研究だより



がまだせ熊本!!
 がまだせ熊大附小!!

本校は地震により大きな被害を受けました。しかし、保護者の皆さま方をはじめ多くの方々からご支援を頂き、5月9日から無事学校を再開することができました。今年度は通常より約1ヶ月遅れてのスタートとなりましたが、子どもたちの安心・安全を第一に、子どもたちを中心とした教育課程を組んで教育の充実を図り、従来の姿に近づけていきたいと考えています。

今年度は例年2月に実施していました公開授業を中心とした研究発表会は中止することにしましたが、前年度に大変好評を頂きました上智大学の奈須正裕先生の講演会は今年度も実施する予定です。また、同日に規模を縮小した公開授業等も検討しています。

地震によって子どもたちや職員を取り巻く環境が大きく変化し、研究も従来通りという訳には参りません。しかし、本校教育のベースである一人一人の個性の中にある「資質・能力」の育成を目指し、日々研鑽を積むことを怠らず、次年度はよりパワーアップした研究発表ができるよう取り組んで参ります。

熊本大学教育学部附属小学校 校長 島田 秀昭

教科等研究紹介

文脈的なプロセス でたどる 真正の学習

研究部長 藤本 裕人



1 「授業づくりは文脈づくり」

この言葉は、本校研究にご尽力を賜っている宗正裕先生からご指導いただいたものです。この言葉には、これからの教育で育むべき汎用的スキルについて、同僚、あるいは他教科での新たな文脈の中で繰り返し使っていくからこそ高い汎用性が身に付くという考え方が含まれています。この言葉を受けて、本校では、同じ汎用的スキルでも教科によって様相が違ってくる大まかにしながら、その教科ならではの文脈を創り出していくことに、新たな研究の視点を当てています。

2 これまでの本校研究の蓄積のもとに

コンピテンシー・ベースの教育に向け、資質・能力の三つの柱（平成 27 年 8 月、中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」）を軸にしたカリキュラムの構造化について、現在、審議が重ねられています。未だ明確になっていないこの時期、本校では、教科等を横断する汎用的スキルやその育成について検討していくことに着手しています。

ただし、今後の取り組みが、決して新しすぎめではないかと思っています。これまで「根拠・理由づけ・主眼の3点セット」をツールに成果を積み重ねてきた論理的思考も、「論点整理」の中で、教科等を横断する汎用的スキルとして例示されています。長年実践してきた「対話的な学び」も、アクティブ・ラーニングの視点の一つとされています。他にも、例えば素朴概念をもとにした切実な課題に出会わせる探究プロセスであれ、子どもの思考の流れを大切にしながら柔軟な修正であれ、一つ一つを見れば、コンピテンシーや文脈づくりとは決して無縁ではなかったと思います。

3 真正の学習を目指して

だからこそ、今、本校の研究に必要なことは、コンピテンシー・ベースの教育に欠かせない「文脈づくり」という視点であります。これまでの成果を土台としつつ、さらに重視する方向、新たに必要となる学習の仕方、あるいは必要なスキル、あるいは必要な学習の位置づけ、真正の学習の達成、自らの探究プロセスを取り組む振り返り等、今後、深めていくべきだと考えます。そのような取り組みから、新たな文脈でもみんなが納得できる解を生み出していく学習が創造できれば、それは「真正の学習」と言えるのではないのでしょうか。それを明らかにできるよう、挑戦していきます。

国語科



下中 一平



坂崎 慎太郎



中尾 聡志

物語文を読むことを通して育む「生きて働くことば」

立松和の「海の命」を読むと、子どもは多様な疑問をもちます。「なぜ太一はクエをうたなかつたのか」「海の命とは何か」と。このような疑問を解決するには、物語に描かれた話し合う価値のある叙述を解釈する必要があります。これまで身に付けてきた知識・技能を関連付け、他者との読みのずれを明らかにする対話を通して、解釈していくのです。

このような主体的な読みを通して身に付けた「ことば」こそ、生きて働くのです。新たな物語を読んだ時、自分の読みを創り出せる「ことば」が身に付く授業を提案します。

生活科



坂口 静恵

子ども自ら問いを立ち上げ、追究する授業の創造

「探検で通れないところがあったよ、どうしてだろう？」地震後の学校探検で、子どもが話していた言葉。

子どもにとって、日々の生活の中には不思議なことや面白いことがあふれています。しかし、子どもによってその見方や考え方は様々で、気付きの質には個人差があります。

そこで本年度は、新たな視点で物事を見るきっかけとなる学習環境をデザインし、「おたすね」によって子ども自ら問いを立ち上げる交流活動を行います。その問いの追究から、一人一人の気付きの質をより高めていく授業を目指します。

社会科



平川 純哉



定松 良彰

協働を通して、自己の「見方や考え方」を育む社会科学習

本校では、主に地域や産業の学習における、子どもの「社会的な見方や考え方」の育成について研究を行っています。これまで、子どもが簡単に納得できない社会的な事象と出会い、「なぜ」と問いを持ち、他者と協働して情報を比較したり関連付けたりする学びのプロセスの重要性を提案してきました。

今年度は、さらに比較や関連付けなどの思考の方法を用い、より多くの見方や考え方で事象をとらえる子どもの育成を目指します。その中で、子ども自身が見方や考え方の変容に気付くような支援や振り返りについて研究を進めています。

音楽科



浦地 悦子



中島 千晴

子どもが自ら音楽と向き合う授業を目指して

昨年度の第6学年「音楽コードでつくる！」の学習では、小学校の思い出を曲に表すという共通イメージに向かい、鑑賞曲から音の重なりやリズムの工夫を見出して、自分たちの音楽づくりに生かす子どもたちの姿がありました。

このように複数の要素に着目して音楽の特徴を感じ取り、表現の工夫を生かす学習を積み重ねていくことで、多面的に音楽をとらえる力が養われていくと考えています。

今年度は、着目した要素を一層自覚できる振り返り方を工夫し、さらに深く音楽と向き合える授業を目指します。

算数科



東 裕治



大林 将典



高野 健浩

創造的・協働的に概念を獲得する授業を目指して

正方形の導入場面では、「ましかく」を「すべての辺の長さが等しい四角形」と捉えている子どもたち。ひし形に対して辺の長さは等しいのに「何か違う」と感じ、対話を通して「直角」に目を向け、正方形の正しい概念を獲得していききました。

本校算数科では、子どもの中に「なぜだろう」と問いを生み出し、子ども自身が概念を獲得していく問題場面の研究開発をしています。さらに今年度は、算数の問題解決を通して培われる、教科横断的な資質・能力にも焦点を当て、生きて働く力を育む授業づくりを目指します。

図画工作科



本山 和寿



母床 栄一郎

他者の感じ方に共感し、自らの感じ方を広げる子どもへ

子どもが作品から読み取ったものに正誤はありません。大切なのは、色や形などの造形要素に着目した鑑賞を通して、友だちの感じ方に共感したり、納得したりしながら、自分の感じ方を広げることです。ただし、作品の造形要素は複雑に影響し合っているため、特定の要素に着目させることはできません。そこで、本校では特定の色や形だけを抽出させた複数の作品を比較鑑賞させ、特定の要素に着目させる授業づくりを提案します。子どもたちが感じ方を広げ、表現や鑑賞を充実させることが、新たな造形活動の展開に繋がります。

理科



前田 理代



松山 明道

見通しをもった問題解決にするために

子ども自身が主体的に問題解決を行っていくためには、事象とのかかわりを通して問題を見いだすことが大切です。

本校では、事象同士、または事象と既知知識との比較で生じた問いをもとに課題を設定し、子どもが自然のきまりを粘り強く探究する姿を目指しています。さらに、本年度は、子どもたちが目的意識をもって観察・実験を行えるように、実験方法を吟味する活動を重視したいと考えています。この活動を通して問題解決に見通しをもち、事象に対する自らの課題を解決する力を培っていきます。

家庭科



廣瀬 文子

子どもの今を見取った実習による実践力の育成

「大根より人参の方が固かった」これは、みそ汁の試し調理後の子どもの気付きです。この気付きから、ほうれん草の根葉和えの学習を想起し、加熱時間や実の厚さに目を向け始めました。この解決したい課題をもとに実験調理等を重ねたことで、出来上がりに合わせ実を入れる意味を理解していききました。文脈の中で実感した理解が実践力に繋がった場面です。

題材の系統や教科の本質を踏まえ、この題材だからこそ獲得できる知識・技能を明らかにし、子どもの今を見取り、学習環境を整えることで、家庭での実践力を育てていきます。

体育科



西村 正之



浅田 誠一郎

自力解決した経験が、生涯体育の原動力になる

私たち体育科は将来の子どもたちの姿を具体的に思い描き、そのために何を育むべきかを追究しています。昨年度は「納得」と「実感」をキーワードに、自分自身の体を通して「なるほど」「こうすればいいの」と前に進む学びを目指しました。このような学びを積み重ねることで、他の運動にも転用可能となる課題解決の方法を身に付けることや、「コツさえ分かればきっとできるはずだ」という態度面でも育むことができるのではないかと考えています。今年度もワクワクする教材に出会わせながら、子どもたちの学びの充実を図ります。

道徳



宮崎 大輔

多面的・多角的な学びで自分の生き方につなげる

「きまりは本当に必要なものか分からない」子どもが抱えた切実な悩み。このような言葉を取り上げ、価値を多面的に考えていくことで、きまりが必要だと考える理由を自分の生活と関連させながら語る子どもの姿が見られました。さらに、視点を広げて多角的に考えることで、きまりを守ることが自分にとって相手にとってもよいと気付くことができました。

本年度も、このように事象を多面的・多角的に考える学びを繰り返し行っていく予定です。そして、自分の生き方を立ち止まらずに考えることができるような授業を目指していきます。

外国語活動



高田 実里

意欲的にコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成

グローバル化が進む社会の中で、子どもたちは言語や文化に対する理解を深め、国際だけでなく、外国語を使って他者を理解したり、自己を表現したりする力が求められています。

これまで、ゲームやタスク活動の中で子どもたちが言葉に着目し、疑問や気付きを話し合う中で、言語の規則性や性質を見つけて出そうとする姿を追究してきました。今年度は、相手を意識できる、現実的かつ必要感のあるコミュニケーション場面を設定し、言葉を大切にしながら、意欲的にコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成を目指します。

保健・健康教育



竹口 洋子

自分の生活や行動を見つめる「振り返り」

昨年度の3年生「体のせいけつとけんこう」の手洗いの学習では、普段の手洗いの様子を児童が互いに観察し、科学的な事実や実験結果から、健康を保持するために、手を清潔に保つ必要に迫られていく姿が見られました。「今までちゃんと洗えていたと思っていたの」と、見えていなかった自分の姿が明らかになっていきました。

そこで今年度は、子どもたちが自分自身の健康課題を改善し、健康な生活を充実させていくための「振り返り」の在り方を追求した実践を目指します。

栄養・食育



松尾 夕貴

食生活を見つめ、課題を解決する力を育む

今まで無意識だった自分の食生活を振り返ったときに、「休日は野菜が少ない」「バランスがとれていない」と問題点に気付くことができた子どもたち。しかし、それだけではなくなかなか行動変容にはつなげていけません。

そこで、給食を教材として活用しながら、実験や体験活動を通して習得した視点を生かして、家庭での食事を振り返っていき、自分の食生活を他者との交流の中で見つめ直し、健全な食生活を構築していくとする態度を養うことで、課題を解決する力の育成を目指します。